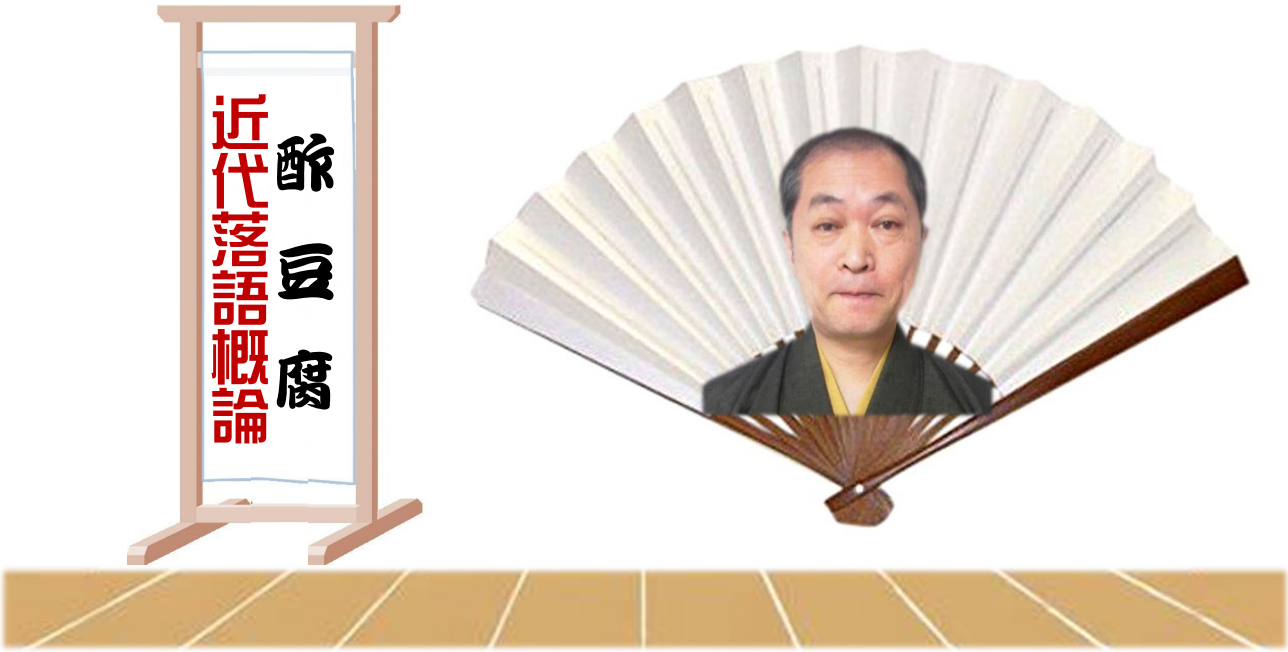
談らく師匠の出前寄席



加藤良一　　令和5年(2023) 1月20日

出囃子に乗って横山談らく師匠が登場しました。会場は料亭の一部屋に設(しつら)えた即席高座です。コロナ禍ですし、さほど広くないので、マスクを外すこともできません。前半の基調講演『**近代落語概論**』という格調高いお話に続いて、後半が古典落語の一席『**酢豆腐**(すどうふ)』でした。

引き続き、しばらくお付き合いのほどお願い申し上げます。

初めに枕としていくつかの小噺を披露しました。枕は本題に入る前にそこへ繋げる役目を果たすものです。余談ですが、立川談志はなんと枕だけで40分以上も喋ったことがあり、そのときは最後に落語に入るきっかけがなくなっちゃったとかぼやいていましたね。

正月といえば、七福神です。ここで、回文をひとつ。回文とは上から読んでも下から読んでも同じ文になるものですね。この会場に回文にえらく詳しい方がおられるので、やりにくいのですが…

長き夜の 遠(とお)の睡(ねむ)りの 皆目醒(め)め 波乗り船の 音の良きかな
なかきよの とおのねふりの みなめさめ なみのりふねの おとのよきかな

これはみごとなおめでたい回文です。
船に七人の神様が乗っていて、真ん中に大黒天様が陣取っています。

酒盛りをしてるんでしょうね、毘沙門天様はさすが動きがいいです。
大黒天様、私がお酌をしてまいりますから。
　あ、頼みます。
福禄寿様いかがですか。
　お、ありがとう。
寿老人様いかがでしょう。
　これはどうも…
布袋様おひとついかがでしょう。（七人全員言うようにしていますんで…）
　いやあ、これはこれは。
あ、弁天様あなたもひと口いかがですか。
　ちょっと取り込んでるんで、そこ置いといてくださ～い。
（舳先に座って釣りをしているのが恵比須様です）
恵比須さん、アツいのがついてんですけど、どうですかひとつ。
（恵比須様振り向いて…）
　オレ、ビールだから…

　世の中には味にうるさい奴ってのがいるもんで、なんか食べるときに、あ～ちょっと醤油とってくれ、それでも気に入らず、やっぱりこれはソースだな、終いにゃバルサミコ酢はあるか！。これは味にうるさいんじゃなくて、単にうるさいだけの奴なんですね。よくいますね、こういう奴。

　ビールを好きな人は多いですね。
　ビールは最初の一杯が旨いんだよ。
　じゃあ、あと飲まないで！

ここから、本題の『酢豆腐（すどうふ）』に入ります。この古典、さまざまなバリエーションがありますが、あらすじはほぼ同じです。
ある時、暇な若い衆が寄り集まって暑気払いに酒を飲もうと相談をしていたんですが、なにせ貧乏人の集まりです。酒はどうにか都合するとしても、肴がない。さて、何処かから調達しなければなりません。

　ところで、何が楽しいって、町うちでわいわいがやがや集まって飲むのは楽しいもんですね。
　昨日はずいぶん飲んじゃったね。昨日飲み終わったのにまたぞろぞろ集まってきたね。
　今度は迎え酒でもやろうってのかい。
　でもね、つまみなんかもう何も残ってないよ。
　えっ、なになに、ぬか床にきゅうりの小っちゃいのがあるって？
　そりゃいいね、ちょっと拾っておいでよ。
　いやですよ、ぬかに手を突っ込むのなんか、とかいいながらとってきたきゅうりを三枚におろしてしまいます。

なにやってんだろうね、ふつうにぶつ切りにすりゃいいのに…。
どんどん若い衆が集ってきました。
なに、タベ与太郎が豆腐を頂いているって…。
そりゃあ嬉しいね、持ってきてもらおうじゃないか。
オイ与太郎、豆腐どこにしまったんだ。
ハ～イ、わたし大事なものだからちゃんとしまっておきました。
だから、どこへしまったてぇんだ。
アノ～、お燗してた鍋ありますね、あの中にずっと置いて、朝になったら冷めちゃいけなんで日なたに出しておきました。
温めたうえに日なたに出しておいた？　おい、誰か回収してこい！

こうして日なたに晒されていた豆腐がみんなの前に出されました。蓋をあけると臭いのなんの、それになにやらモヤシのようなものが生えています。

ずいぶん変なことになっちゃってるね。これはひどい匂いだ。二丁もあった豆腐どうするんだ。

こういう時には、だいたい若旦那ってぇのが通りがかります。小唄なんぞをうたいながら歩いてまいりました。ここで、談らく師匠が小唄を歌います。

※演者解説：小唄は「門松」です。「門松に　一つ止まった逸い羽根の　それから明けるぅ年の朝　早も三河の大夫さぁん …」この辺まで歌いました。だいたいは、手拍子がきて最後まで歌いますが、この日は時間も押しそうでしたので、途中までにしました。踊りも付けられます。なんの自慢にもなりませんが。

若旦那が入口の外まで来て、そこで小唄がハタと止まりました。

誰か若旦那呼んで来いよ。
若旦那ボーっと立ってないで、こっち入ってくださいよ。素通りはないでしょ。
エ～、また、みんな集まってるわけ！。
じつは、頂き物をしたんですが、どういう名前の料理かわからないし、食べ方もわからない。
若旦那ちょっと見てやってくださいよ。
ハイハイハイ。私が見ましょう。私は食通、グルメですからね。ふだんは大人しいけど、味にはうるさいんですからね。ハイどれどれ、ウワッ、クー、ブワーッ(*_*;。ウン、よくこんなものが手に入ったね。ありがと…。
ありがとじゃないんですよ。で、これはどういうもんなんですか。名前はなんてぇんですか？
名前はね、ウン、そのまんま、発酵食品、酢豆腐っていうんだ。
へエー、そうですか。ホー、でちょっと召し上がってみてくれますか。
ウ～ン、そうか、でも今ねちょっとお腹いっぱい。間食はしないタイプだからね。

無理強いされた若旦那、酢豆腐の臭いを嗅ぎます。

ウワー！、すごいおつな匂い。
で、若旦那どうやって食べたらいいんですか。ひと口召し上がってみてくれませんかね。
ウッ、トットット、すごい匂い、ウワすごい…、目にくるね。
ひと口食べてください。
オッ、美味、おいしい、おいしいねっ…
もうちょっと召し上がってください。
いや、おいしいものはひと口にかぎります。

合唱も歌う落語家

横山談らく師匠は、子どもの頃から大の落語好きでした。埼玉県立川越高校在学中に上方出身の師匠より見染められ落語の世界へ入る決意をし、一年間修業した後、なぜか外資系企業に就職、原子力プラントなどを手掛け部長職にまで昇進しましたが、その後、立川談志門下に入り、落語界に身を投じたという経歴の持ち主です。2011年立川流一門から離れ、全国で高座を務めるかたわら多くの講演をこなしています。談らく師匠には兄弟子さんとお弟子さん4名がおられます。

また、落語家にしてはめずらしく男声合唱もこなし、男声合唱団イル・カンパニーレ、男声合唱団ヴィヴ・ラ・コンパニーのメンバーとして歌っており、埼玉県合唱連盟賛助会員でもあります。

▣　▣　▣　▣　▣　▣　▣

筆者と談らく師匠とは合唱の世界では長い付き合いですが、これまで本職の落語を聴く機会がありませんでした。今回初めて聴かせてもらいましたが、その語り口は決して派手じゃなくしっとりとしたもので、優しくじわりと聴衆の懐に入ってくる感じとでも形容したらよいでしょうか。

前半に行われた『**近代落語概論**』と名付けた講演では、創作と江戸の小噺をいくつか並べ、笑いを誘ってから、落語の変遷や逸話の話に入りました。

立川談志は、昭和58年(1983)、落語協会の古い体質に反発して脱退、《落語立川流》を旗揚げし、家元を名乗りました。そうなると新宿末廣亭や浅草演芸ホール、お江戸上野広小路亭といった定席の演芸場には出ることができませんから、その他の会場やお座敷などでやらざるを得ませんでした。しかし、コロナ禍で演芸場などが使えなくなったときに、フリーの身軽さが生きてきたというから世の中何が起きるか分かりません。

あるとき、落語がはねたあと、円楽師匠と談志師匠の二人がいたといいます。円楽師匠はお付きの弟子に「もう帰ってもいいよ。あとは談志さんと二人で落語について話すから、どうぞお帰んなさい」とお付きを帰らせました、かたや談志師匠は「これから円楽さんと落語の話をするんだけど、良かったら聞いてってよ」という対照的な振る舞いだったそうです。円楽と談志の思いやりのちがいが面白いところです。

そして、『文七元結（ぶんしちもっとい）』※という落語の話になり、談らく師匠（当時小吉と呼ばれていた）に談志師匠が「この噺のキーパーソンは誰だと思う？」と問いかけました。そこで小吉さんは「置屋の女将（おかみ）がキーパーソンだと思います」と答えました。「そうだ、そのとおりだ。オレもそう思うんだ。…で、どう演じたらいいと思う？」と畳みかけてきました。思うところはあったものの、そのまま話すことはできずにいました。

要するに、談志師匠は、どのような思いで演じるのか、落語というのは一人ですべての登場人物を演じ分ける特殊な芸能だからこそ、その人物像を際立たせなければだめなのだ、人の生きざまを描けと力説したそうです。つまりリアリティをもって演じる必要性を学びました。

▣　▣　▣　▣　▣　▣　▣

落語を演じるにあたって、土地や町場の風を吹かせろ、とよく言われるので、落語の舞台となる場所に足を運ぶことがあります。つまりロケハンです。

2022年度全日本合唱コンクールの男声合唱課題曲に『平林／落語「平林」より』という曲がありました。その舞台はどの辺りだろうか、日本橋浜町からずうっと上がったあの辺りかなとか、足で確かめるんです。

講演の最後は神様についての小噺で落ちをつけました。

神様にもいろいろありますね。初詣に出かけたら、知ってる奴に出会っちゃう。
やな奴だな「やい、貧乏神どこ行くんだ？」
「いやぁ、今お前んちいくところだ」
そういうときに限って帰りにも会っちゃう。
こんどは違うことも言わなくっちゃと、「やい、福の神どこ行くんだ？」
「やあ、今お前んちから出てきたところだ！」

▣　▣　▣　▣　▣　▣　▣

この催しは、公益社団法人埼玉県弘済会（埼玉県職員OBの会）埼葛支部の新春講演会で行われたもので、外部からも参加者を招くというので筆者も聴かせて頂きました。

※江戸に住む左官の**長兵衛**は、腕は立つが、ばくち好きで、仕事もせずに借金を抱えている。年の瀬も迫るある日、前夜の負けがこんで、身ぐるみ剥がれて半纏一枚で賭場から帰されると、女房が泣いている。聞くと、娘の**お久**が吉原の「角海老」に身を寄せているという。娘は、身売りして金を工面し、父に改心してもらいたいと「角海老」へ頼み込んだという。女将は長兵衛に、娘は自身の身の回りをさせるだけで店には出さない、次の大晦日まで五十両の金を貸してやるが、大晦日を一日でも過ぎたら、女郎として店に出す約束させた。改心しきった長兵衛が、帰り道に吾妻橋にさしかかると、身投げをしようとしている男にでくわす。わけを聞くと、その男は**文七**といい、鼈甲問屋「近江屋」の奉公人であった。お使いを頼まれて集金した帰りに五十両の大金をすられたので、死んでお詫びをしようというところだった。

「死んでお詫びを」「いや、死なせねぇ」と押し問答が続いた後、長兵衛は、自分の娘が身を売って金を工面してくれたことをはなし、その金でお前の命が助かるのなら、娘は死ぬわけではないからと、無理矢理五十両を押し付けて、逃げるように帰ってしまった。

文七は店に買って主人の**卯兵衛**に、長兵衛からもらった金を差し出すと、それはおかしい、お前が遣いにいった先で囲碁に熱中するあまり、売掛金をそっくりそのまま忘れてきてしまったものを、先方は既に届けてくれて金はここにある、一体どこから、また別の五十両が現れたのかと、主人が問いただすと、文七は事の顛末を白状する。

翌日、卯兵衛は文七をお供に長兵衛の長屋へとおもむく。実は文七が粗相をやらかし…と、事の次第を説明し、五十両を長兵衛に返そうとするが、長兵衛は「江戸っ子が一度出したものを受け取れるか!」と受け取らない。もめた挙句に長兵衛ようやく受け取り、またこれがご縁ですので文七を養子に、近江屋とも親戚付き合いをと、祝いの盃を交わし、肴をと、表から呼び入れたのが、近江屋が身請けをしたお久。後に、文七とお久が夫婦になり、近江屋から暖簾を分けてもらい、麹町六丁目に**文七元結**の店を開いたという一席です。

＜落語エッセイ＞

K-47　しまった！　こんな世界だったのか　落語に魅せられた談志の人生　2019年4月17日

立川談志16歳のとき、柳家小さんに弟子入りしたが、飛び込んでみて知った落語のびっくりな世界…

K-44　はじめての談志×これからの談志　2017年10月27日

談志は死んだら葬式もお経も戒名もいらないと自分で「立川雲黒斎勝手居士」と戒名を作った…

K-42　すいせんかだんしがしんだかんせいす　2016年11月11日

「水仙花談志が死んだ完成す」はよくできた回文、何が完成したのか…

K-26　落語と音楽のコラボ　死神　2011年1月4日

東京文化会館小ホールで行われた、音楽付きの落語、新しい試みで落語の世界を広げるか…

K-13　テケレッツのパ　演目「目黒のさんま」「死神」　2004年10月31日

落語の「落ち」にはさまざまなものがある。駄洒落で落とす地口落ち、意表をつく見立て落ち…